

『近世学問都市京都 ―中江藤樹学派と京都―』

岡山大学教授 高橋 文博

ご紹介いただきました高橋です。立命館大学文学部で、京都を中心的テーマとする21世紀COEが立ち上がって活発にやっておられるということで、大変敬意を表しております。またそこからシンポジウムにお招きいただきましたことを大変光栄に思っております。このCOEの中核をなす研究グループが近世学問都市京都を対象としているということで、そのお招きですから、そのまま近世学問都市京都という名前でお話をさせていただこうと思いましたが、挫折しました。近世学問都市京都を基調講演にふさわしく論ずるわけにはいかないことがよく分かりました。結局、自分自身がやってきた研究をおさらいするような形でお話しするしかないことになりました。

中江藤樹（一六〇八～一六四八）あるいはその学派と京都とのかかわりを調べて、彼らにとって京都がどういう位置を占めているのかということが、いささかでも見えてくればいいだろう、そういうお話になります。ここでは、新しい資料に基づいて新しい発見を申し上げるわけではなくて、皆さんからすればもう聞き飽きたという話になるかもしれないのですが、中江藤樹とその学派を京都との関係で調べてみると、たしかに京都に視点をあてることで見えてくる面もないわけではないという程度の話になるかもしれません。立派な研究会でしかも基調講演ということでお招きいただきながら、誠にお恥ずかしいような気もしておりますけれども、お付き合いいただきたいと思います。

1. 中江藤樹と京都

まず中江藤樹と京都のかかわりですが、年譜から見ていきます。『藤樹先生全集』第五巻の岡田氏年譜という比較的信用度が高いとされているものを中心にみていきます。元和七年、一六二三年、藤樹が十四歳のとき「嘗テ寺ニ入テ手跡ヲ学ビ其暇ニ詩聯句ヲ学ブ。マヽ佳作アリ」とあります。寺で文字を習い、詩や聯句を学んだということです。この僧侶の名は異本第二や川田氏本年譜には曹溪院天梁和尚という名前が挙がっています。ともかく仏教僧侶に習っているのです。また、岡田氏本年譜の異本第二では、「或人和尚ニ謂テ曰、中江原キワメテ聰明ナンゾ話則ヲ參セシメザル其未悟ルベカラザルヲ以カ。和尚曰、不然我コレヲ示サバ速ニ會得スベシ。然リトイヘドモ却テ滿心ヲ生センカ。コノ故ニツイニ示サズ。」と記されている。ある人が和尚に向かって、藤樹に禅の公案を示さないのは理解できないと考えるからかといったところ、そうではなく藤樹はすぐに会得するであろうが、いい気になってしまうのを恐れて示さないといっているのです。藤樹が文字を習い、文学に親しむという場面は、まず仏

教寺院にあったのでした。これは京都とはかわりはありませんが学問らしきものの最初のかかわりが仏教寺院であったことに注意しておきたいと思います。

藤樹が京都にかかわってくるのは十七歳のときで、「夏醫師ノ招ニヨツテ京都ヨリ禪師來テ論語ヲ講ズ」とあります。京都から仏教の禅のお坊さんがやってきて、論語を講じた。

「此時大洲ノ風俗武ヲ專ラニシ文學ヲ以テ弱也トス。故ニ士人コレヲ聞モノナシ。唯先生獨リ往テコレヲ聞ク。蓋先生幼シテ祖父母ニ離レ家ヲ繼君ニ事フ。是故ニ身ヲ脩メ家ヲ齊ヘント欲スレドモ其道ヲシラズ。嘗テ大學ノ句讀ヲ習ニ、正心・脩身・齊家等ノ語アルニヨツテ儒學ニ身ヲ脩メ家ヲ脩メ家ヲ齊フル道アルコトヲ知ル。然ドモ教ルモノナフシテ黙止ヌ。今禪師來テ講ズルヲ幸トシテ、潜ニ往テ是ヲ聞ク。論ノ上篇ノ講終テ禪師京ニ歸ル。先生又師トスベキ者ナキコトヲ愁テ、四書大全ヲ求ム。然レドモ人ノ誹謗ヲ憚テ晝ハ終日諸士ト應接シ、毎夜深更ニ及デ業トシテ二十枚ヲ見終テ寢ヌ」。

藤樹は儒学に志したのですが、それを学ぶ相手は禅師だったのです。どういう関係があったのか分かりませんが、京都から禅師が来たのです。一七世紀前半のこの時代は、すでに共通理解になっていますが、仏教が社会的に非常に優勢だったのです。儒学を学ぼうとすればお坊さんから学ぶ、しかもそれが京都から来たのです。

次のエピソードは林家にかかわるものです。「洛において旧友有り、己巳の冬、書を潮信に寄す。其の書尾に於て、林左門作る所の「安昌、玄同を弑するの論」を筆す」。藤樹は、寛永六（一六二九）年の段階では大洲にいたのですが、京都にいた旧友を通じて林家の林左門にかんする情報を得ている。さらに、林羅山が剃髪するという情報を得ている。この当時、林羅山自身は江戸にいたはずですが、京都の友人が情報源になっている。儒学に関する情報を京都から得ているのです。

二十七歳のとき、この年がいわゆる藤樹脱藩帰京の年になるわけですが、「冬十一月京ニ在リ。先生逃去ルヲ以テ君ノ惡ミアリテ江陽ニアルコトヲ防カレンコトヲ慮テ京都故友ノ家ニ寓シテ命ヲ待ツコト百日餘。其尤メナキヲ以江陽ニ歸ル」。京都に友人がいたので、いったん京都に寄ってそこで様子を見ているのです。京都はお寺がたくさんあって、お坊さんがいて、あわせて儒学を学ぶという場面であると同時に、流浪せざるを得ないような状況に置かれた人にとって、一時隠れることも可能なような場所であったのでした。

二十八歳、「今年始テ筮儀ニ通ズ。先生曰、我易ノ理ニ於テハ心ヲ盡サバ或ハ其万一ヲ得ン。筮著ニ於テハ其傳ヲ得ズンバ能セジト。是ニ於テ京師ニ行テ易ノ講師ヲ求ム」。

実はこの間に事情があります。藤樹は儒学の中で易に深い関心を持つようになっていきます。四書の世界から五教の世界にいくきっかけは易にありました。京都に行って易を教えてくれる人を探しました。ところが、師の1人は易を習ったあとに銀数枚

を出すことを求めた。けれども藤樹は貧乏だから出せない。別の人には、講義が終わるまで1日もよそに行ってはいけないといった。講義の半ばで逃げて行って、あれこれ文句をいうと困るからだということです。藤樹は、文句をいうつもりはないけれども、1日もよそに行かないで聞き続けることは約束しがたいので、これを断ります。「是ニ於テ易書ヲ求ルニ始メテ啓蒙ヲ得タリ。江陽ニ歸テ後此熟讀筭考シテ其筮儀ニ通ズ」ということになります。

易における占いを中心としたこと、占いそのものではないにしても理によって判断するのでない易について学びました。これを「易学啓蒙」という書物によって知ったわけですが、やはり京都に行かなければ儒学は学べないという状況があった。あるいは京都へ行けば学べるだろうと思ったということで、京都はそういう場所であったのです。

この同じ年の春に「洛に於て偶成」という詩があります。「吾れ孤り瑟を鼓し、世皆筚す」。要するにみんなは瑟を鳴らしているけれども、自分だけが笛を鳴らしている。

「面友盡く言ふ、絃を絶つべしと 今亦期有り人識らず 鳥紗巾上、是れ青天」。鳥紗巾上というのは官職に就いている人の帽子ですが、ともかくここでいっている意味は、藤樹は非常に孤独であったということです。藤樹は、京都へ易、あるいは儒学を学びに行くのですが、友人はいるけれども、それは面友であるということです。藤樹は面友と心友は明確に区別しています。友人は琴を一人で鳴らしてもしょろがないから、我々と一緒に笛を吹こうではないかというのですが、藤樹は孤独な中で儒学を学び続けようという意味の詩です。頭の上に青天があるというのは、たぶん皇上帝が意識されていたと思います。

こうした事実から、藤樹において儒学への志は早くからあり、それを満たすには京都へ行かざるを得なかったけれども、京都においても儒学はそれほどポピュラーではなかったし、友人たちもあまり儒学に熱心ではなかったことが見えてきます。

二十九歳のとき、既に小川村にいます。「秋先生京ニ行。先生池田某ト元ヨリ友タリ。此時池田氏筑州ヨリ洛ニ来ル。先生モ亦行テ會ス。又始テ嶋川子ニ逢フ。是ニ於テ易ヲ談論ス。月ヲ閲テ歸ル。此ヨリ后終身マデ洛ニ不行」。池田氏がどういう人なのか、また嶋川子がどういう人なのかも詮索してみると面白いようなのですが、いまは立ち入りません。藤樹はこれ以後京には行かないで、易を中心として儒学に関心を持ち続けているのです。

この二十九歳の夏の詩に「藤田嶋川兩生を送る」というものがあります。この詩の序に「藤田子に洛に會つて而して又邂逅す。初めて嶋川子に逢ふ。皆心友なり。是に於て丸を弄し、易を譚じ、惟れ日も足らず。別に臨み已むを得ずして、而して一絶を賦し以て相責むるの一助を庶幾すと云ふ」とあります。

「丸を弄す」というのは藤樹の「熟語解」によりますと、丸は大極の異名で至善のことであり、至善に止まる工夫に余念がない状態をいうとあります。藤樹は、易を学

びつつ、易を通して大極に沈潜する、つまりこの世界の根源に深く沈潜する体験を心友と語りあい共有しているのです。

このことが詩の二句では「波瀾起ると雖ども點も瀾無し」と述べられています。世俗的なあるいは現象的な世界はさまざまな波立ちがあったとしても、根源的なものに接する体験、そして、根源的なもの自体は絶対的で動きのないものであるということです。

さらに三句で「父慈に子孝なるは晝前の易なり」といっています。卦や爻といったものが書かれる以前の易が、親と子の関係における慈と孝という道徳的なあり方であるということです。孝と慈は現象的に易として指示される以前の易そのものであるという立場であります。易があくまでも儒学的な、特に孝というもののとの関わりで考えられています。

わたくしの考えでは、藤樹という人は終生儒学的な原理に立脚し、儒学のメタフィジカルなコスモロジーの中でものを考えていた人です。仮に道教的な用語が使われたり、仏教的な用語が使われたとしても、それは藤樹の学んだ明末の思想を反映しつつも、儒学の形而上学を堅持して、仏教や道教あるいは神道をその内に組み込んでいたのだと考えています。儒学的な要素と道教的な要素、あるいは仏教的な要素をミックスしたものが藤樹学であるという考え方は、わたくしは正しくないと思っております。

三十三歳の年、寛永十七（一六四〇）年のところで、「性理會通」を読んだことをきっかけにして太乙神を祀るようになったとあります。「性理會通」を一六四〇年に読んでいるのですが、この書物は中国明代末期・一六三四年に鍾人傑の編集したものです。わずか6年の違いで手に入れているので、結構早いのではないかと思います。長崎に舶載してきた書物がどういう経路で届いているのかということを調べなければならないと思いますが、とにかく藤樹が京都には自分で行かないで、小川にいて手に入れている。いろんなものを手に入れている、しかも比較的早く手に入れているので、やはり何らかのルートを持って京都と接していただろうということを想定できると思います。

同じ年の「翁問答」の話になります。「秋豫陽ノ同志ノ求メニ依テ翁問答ヲ著ス。已ニシテ後其書心ニカナワザル處多シ。故ニコレヲ改メント欲シテ同志トイヘドモ博クコレヲ示サズ。然レドモ癸未ノ春梓人此ヲ盗ミ取テ板行ス。先生此ヲ聞テ梓人ヲシテコレヲ破ラシム。此ヨリ改メ正ント欲ス」。

この梓人は出版人のことですが、これが風月宗智であることは、「鑑草」が風月宗智の出版であることからわかります。藤樹が私的に弟子たちに示した「翁問答」が京都の風月宗智のもとに流れているのです。

三十四歳の年です。「夏二三子トモニ勢州大神宮ニ参詣ス。此ヨリ前會テ以爲ク。神明ハ無上ノ至尊也。賤士ニシテ貴人ニ近クスラ馴瀆ノ恐レアリ。況ヤ神明ヲヤ。是ヲ以テ終ニ神ニ詣拜セズ。其后學日々ニ精微ニ入（ル）。故ニ以爲ク士庶人モ亦神ヲ

祭ルノ礼アリ。然ラバ則チ神ニ詣スルコトモナクンバアルベカラズ。且大神宮ハ吾朝開闢ノ元祖ナリ。日本ニ生ル、者一タビ拝セズンバアルベカラズト。是ニ於テ詣ス」。

藤樹は、ある意味で非常に硬直した考え方の人であつたように思えるところがありまして、納得しないとやらないのです。非常に理詰めで考え、また、経書だけでなく、かなり雑書に近いものを材料にして、そこに典拠を発見する形で太乙神を祀ったりする。書物による思索に基づいて、庶人である自分も伊勢神宮に参詣してもいいのだと納得した上で伊勢に行く。

日常的なレベルでの、あるいは習俗的なレベルでの神信仰や礼拝が彼の周囲にあったことはあつたとしても、それが彼の思想世界の中で折り合いがつかない限りはやらない。折り合いがつけば、それを受け入れて実行する。藤樹は、そういう行動をとった人だと思われるのです。

伊勢参拝は、藤樹において、伊勢神宮が彼の形而上学的コスモロジーの中で論理的に位置づけることが可能になったという点で、非常に重要な意味があると思います。

このことの反面になりますが、天皇に対して具体的にどうするということが出ていません。『全集』第五巻をご覧になれば分かるのですが、『全集』編者が中江藤樹の国家的精神を語ろうとしても、藤樹には天皇に対する尊崇の念が出ていないために、説明のしようがない。かろうじて神道を受け入れたとはいえるし、伊勢神宮に参拝したということまではいえるのですが、天皇を藤樹が尊崇したとは、いいにくい面があるのです。

同じ三十四歳、寛永十八年の熊澤蕃山（一六一九～一六九一）入門の有名な話があります。蕃山は、以前、備前岡山藩に仕えていたのですが、島原の乱の際に蕃山のとつたある行動について岡山藩の中で非議するものがいました。しかし、藩主池田光政はむしろそれを肯定して重く用いようとしたのです。蕃山は、その光政の志に感服して忠誠を尽くそうと思いますが、そのためには学問がなくてはならないと考えました。いったん職を辞して祖母である伊庭氏の郷里・近江の桐原に行きます。これは寛永十五年のことですけれど、ここに両親と弟妹も寄寓しておりました。寛永十七年に蕃山は「四書集註」を読んで感ずるところがあり、儒者になろうとします。そして師にこうとして、翌年の寛永十八年の秋に京都に出る。やはり熊澤蕃山も近江・桐原にいて、儒学に志したら京都に行くという行動をとっているのです。

蕃山は京都に行きましたがなかなか師がない。鬱々として宿にいるとき近江小川村に中江藤樹という人がいることを聞いて、寛永十八年七月、藤樹を訪問するのですが、藤樹はいったん入門を断ります。このときは疑わしいところを質問して帰り、九月にまた訪ねてきて入門を許されて、翌年四月までいた。ところが、蕃山の父親が江戸に行くことになったので、蕃山は母親と弟妹を養うために桐原に戻らなくてはいけなくなった。そういう経緯があつて、蕃山は五年ほど貧乏生活をして、やがてまた池田光政に仕えることになるわけです。

儒学を学ぼうとしてもなかなか師がないというのが京都の状況であり、しかしまた、儒学を学ぼうとすれば京都に行かなければならなかったのです。十七世紀後半には伊藤仁斎とか山崎闇斎とか偉大な儒者が出てきて、儒学が盛大になるわけですが、少なくとも十七世紀前半は、そういう状況ではない。近世学問都市京都とはいえないのです。儒学を学ぼうとしてもなかなか学べない状況が京都にはあったといえるのです。

正保元年・三十七歳のとき、「陽明全集」を手に入れて読みます。この「陽明全集」を得るのもやはり京都のルートではないかと思います。

そして、正保四（一六四七）年、「鑑草」を四十歳のとき刊行します。これは先ほどもいいました風月宗智による刊行です。この経緯については「池田子に与ふ」というよく知られた書簡があります。「翁問答」を作ったけれども、気に入らないところがある。これを勝手に出版しようとして板木を彫った者がいたので、板木をこわせた。出版人がそのために損をしたことの肩代わりに「鑑草」を書いて出版させたというのです。

これを出版した風月宗智は、弥吉光長『出版の起源と京都の本屋』という書物には「風月の初代は風月宗智で僧籍の人らしい」とあります。出版活動が京都で行われる場合、それは仏書を中心に行われていました。ですから、儒学関係の書物が出されていくにしても、かなり由緒のある風月の初代は僧籍の人で、それが儒書も出すということになっている。

僧侶が儒学を学び、儒学を教える。そして僧侶が書物を出版する。多くは仏書を出版するが、儒書も出版するという形になっています。学問といえば儒学であるというようになっていく、そういう学問として正統性を持つ儒学が成立する大前提は、こういう仏教的な世界が先行しているということでありました。しかし仏教的な世界から儒学が新たに生成せざるを得なかったといえますか、生成していくという事実があった。非常に平凡なことのようではありますが、そういう経緯というものが、中江藤樹の年譜のわずかな検討からうかがわれるということです。

藤樹の没後、藤樹門人の三年の喪の解散命令ということが起こりました。「中川權左衛門・加世八兵衛・中村亦之允・山脇佐右衛門・又右衛門近邊ノ同志諸生ト申シ合於祠堂期ノ喪ヲ勤メント諾セシニ御領君無御許容、（無）是非離散ス。」（「藤夫子行状聞傳」『全集』第五卷）

藤樹が非常に可愛がった弟子の中川權左衛門（謙叔）をはじめとして、五人の名前があがっています。これら藤樹門人が藤樹の祠堂で喪に服そうとしたとき、大溝藩主分部氏が立ち退きを命じたのです。

「加世八兵衛（中略）祠堂ヲ退ク時之文曰（中略）先輩（等）相謂テ曰、夫子已ニ逝クトイフトモ、趣クベキノ道路已ニ聞キヌ。吾儕等講習琢磨シ聖域ニ至リ夫子終身之思ヒヲナサシメント。豪傑ノ友已集リテ講習討論日久ク、輔仁ノ益少カラサリケル

ニ、國主如何計リノ事ニヤ、吾儕等ニ藤樹ヲノキ侍ルベキトノ告ナリケレバ、民ト而否云ニヤ及ブベキ、相共ニ切悞ノ情ヲ離レテ他邦ニ分散シヌ。嗚呼國主イカ成惑ゾヤ。嗚呼國主イカンカ惑フ事ノアルヤ。聞説（ク）大唐ニハ家少シ有小里迄モ學校有テ、日々ニ心學ヲ講ジ、民ニ道ヲ教ヘ苦ヲ除キ樂ミヲ興ヘ玉ヒ侍ルトコソ。嗚呼國主如何成惑ヒゾヤ。」（同上）

藩主に対するかなり強烈な表現が出ています。

「此ノ惑ヒ國主一人ニ限ラズ、天下ニ皆侍ルナレバー遍ニ聖（聖）學ノ世明カナラザル故也。聖（聖）道世ニ暗キ事ハ學ブ人之誠アラザル成ベシ。嗚呼吾儕等モ聖道ヲ學ブノ徒ニシテ未ダ誠有ザル成ベシ唯聖道之身ニ誠有ン事ヲ希而已。」（同上）

夫子というのは藤樹のことを指しています。「嗚呼國主如何成惑ヒゾヤ」と重ねて大溝藩主を非難しています。柴田甚五郎氏は幕府が大溝藩主通じて解散命令を出したと書いています（柴田甚五郎「藤樹學者淵岡山と其學派、事蹟の研究」帝國学士院記事第一卷第一號）。幕府の命令であることが本当かどうかはわかりませんが、このような解散命令が出たということです。今申し上げた三年の喪をやった人たちは、時期的に若干違うにしても、やがて岡山藩に引きとられていきました。

藤樹の学問は、後にも出てきますように、人が寄り集まってお互いに議論しあいながら、道徳的な営みに精進すると同時に、その道徳を実践することで得られる心の樂を獲得することを目指すものでありました。集会を開くことも問題なのでしょうが、それだけでなく、ここには出てきませんが、その行動が仏教的な習俗と抵触するところがあり、弾圧されるのだとみられるのです。

藤樹自身はたった一人で儒学を学び始め、大洲藩で笑い者になったということもあって、大変孤独であったといえますが、藤樹心学の継承者であった弟子たちも、儒学のために社会的には孤立するような傾向を持っていたのです。

藤樹の学問を継承する流れは、非常に似たような経緯をたどりつつ、しかも儒学の学びの根拠地として京都を志向するということが起こっています。次には、藤樹を離れて、淵岡山（一六一七～一六八六）の流れを汲む会津藤樹学派を中心にお話したいと思います。

2. 会津藤樹学派と京都

①淵岡山の京都学館設立

淵岡山が京都学館を設立することについてお話します。

「先師（藤樹）終焉後は、帝都岡山と云所に出給ひ、門弟子を集て藤樹の學を任じ給ひ。諸方遠近の同志夥敷、當學天下に行はれけるが。其頃備前岡山之家中熊澤了介、藤夫子之門人にて、岡山先生も度々交集討論も有之處、熊澤氏公儀より御不審之事有之、出奔致候につゐて、萬一將軍家より御疑ひも可有之とて。彼のわざわざを避んが

ため、梅尾と云所へ御退引被成。岡源右衛門と名乗被成る候由。岡山と云所に被居たる故、岡山先生と諸生尊稱致候由申傳候」（「北川親懿翁雜記思案録抄」）。

これは会津藤樹学派の文書の一つですけれども、藤樹が亡くなった後、藤樹についていた淵岡山が、京都の岡山というところに行ったといっています。京都を「帝都」と呼んでいるところも面白い点です。淵岡山が、岡山というところで門弟子を集めていたところ、蕃山が権力側から弾圧された気配があったので、淵岡山自身も災いを避けて梅尾に引退したというのです。

岡山先生の名前の由来である「岡山」については、『全集』第五巻には、洛外に岡山という場所がない、そこで船岡山あるいは双ヶ丘の京都一条あたり、西京極あたりかもしれないとしています。証拠がなく『全集』編者は「岡山」という地名の場所を決めかねているのです。

淵岡山は、蕃山への弾圧に遠慮して引きこもっていたけれども、累が及ばないことがわかると京都学館を作ります。「熊澤出奔後は、公儀より深く御糺しも無之、もとより岡山先生に御かかりの事とても、會て無之事に候へば、御延引にも不及事なれども君子の御慎みにて、暫は御隠れ有しと見え申候。折節延寶二甲寅京都西陣葭屋町稲葉右京亮殿（豊後臼杵の城主景通、五萬石也）、屋敷有之候を被賣拂に付、價拾五貫三百目にて被買求、是に御引移。藤樹先生之祠堂を建、書院を奥に、居間を書院に、中を會所に被成、御祠堂へは表裏縁傳に往来被致候由」（「北川親懿翁雜記思案録抄」）。

淵岡山は、このとき老人で金が無かったので、京都・大阪の人々が金を出し合って、大名屋敷を買い取ったというのです。そのほか学館の備えとして三百兩用意したとあります。さらに「雑用出金」として会津十一兩、江戸十一兩、石州三兩、肥州二十三兩と書かれていまして、これは非常に面白い資料です。

この京都学館の所在地はどこかという、柴田甚五郎氏によれば（前掲論文）、上京区葭屋通元誓願寺下ル徳屋町の西側です。四〇〇坪くらいの敷地であったということです（木村光徳『日本陽明学派の研究』）。

②会津藤樹学派と京都学館

この京都学館の備金を出した中に会津の藤樹学派がありました。会津藤樹学派発祥の由来も興味深いものがあります。「会津藤樹各派道統譜」は天保七年（一八三六）年の序がついていますが、そこに次のような記述があります。

「（大河原養伯は）會府の人なり。醫術を嗜む。荒井眞庵と諏訪神社に祈り、實學の良師を求む。神宣を得て、共に京師に至る。岡山先生に謁して、良知の微妙を學ぶ。同く歸りて矢部總四郎に告ぐ。是より藤學會津に周流す。荒井氏と共に會津藤學の祖と爲す」。

同様な話がいくつかの文献にありまして、骨子は、大河原養伯と荒井眞庵が、実學を求めて会津から京都に行ったということです。そして、どういうきっかけかわか

らないが、二人は淵岡山に出会って「良知の微妙」を学んで会津に戻り、そして矢部總四郎にこれを伝えた。これがいつのことかは、矢部總四郎が亡くなった延宝五（一六七七）年以前という程度のことしかわかりません。

大河原養伯と荒井眞庵という二人の医者がまず京都へ行って、次に矢部總四郎（肝煎）が京都へ行って、そして戻ってきて五十嵐養庵（郷頭）、遠藤謙安（郷頭）、東條長五郎（肝煎）という人たちに伝えた。この矢部總四郎は早死にするのですが、五十嵐養庵、遠藤謙安、東條長五郎という喜多方の三子といわれる人たち辺りから、藤樹学が非常に盛んになるのです。

大河原養伯と荒井眞庵という医者は立派な人物であったのですが、彼らから藤樹学を矢部總四郎に伝えて、そこからまたこの三子に伝わることで盛んになっていくという経緯を考えたときに、会津の藤樹学において「肝煎」あるいは「郷頭」という役の人が非常に重要な意味を持っているらしいことがわかります。

肝煎というのは村ごとに一人置かれて、村内の一切の事務を処理した役です。郷頭はその上にいて、数村ないし十数村からなる組という行政区画に一人置かれた役です。これらは家格によって定まっていた世襲でした。江戸時代以前の土豪的系譜を引くものが多かったとされています。この肝煎・郷頭は、それ以下の者とは一線を画して、決して婚姻関係を結ばなかったといわれています。この辺は『福島県史』第二一巻の山口孝平氏の記述をそのまま紹介しているに過ぎません。また、『福島県史』には藤樹学派の中心的存在である郷頭や肝煎の家は、何軒かが相互に婚姻関係にあり、それゆえに会津藤樹学派というのは、思想的な結びつきと血縁的な結びつきがミックスした形で継承されていたと記述されています。

こういうふうに、会津藤樹学派は、土地の有力者である肝煎とか郷頭が受け入れる中で盛んになっていくのですが、それに大きく火をつけるような役割を演じたのが淵岡山でした。淵岡山は仙台の人で、仙台に行く途中、会津に寄って講演をしました。これによって会津の藤樹学は大いに盛り上がるようになったのです。しかも、このことがまた会津藤樹学派に弾圧を招くきっかけにもなっております。この事情についてのまとまった記述が『會津藩教育考』にありますので、まず、それを紹介します。

「天和三（一六八三）年癸亥十二月二十七日心學禁制の令發せらる」の項目です。「按ずるに今年四月仙臺の浪士岡四郎左衛門といふもの來りて王陽明の心學なりとて唄ひはじめしより、市在とも大に流行し、その道に入りしものは夜間相會し、その座を清座と稱し、惠慮意念なといふ詞を以て平生の心持、朝夕の身持につき善惡を論して互に研究し、その内學力あるものは四書を講し、愚夫愚婦の心に入り易きやう孝經を説き、また熊澤伯繼（蕃山と稱す 備前侯に仕ふ）か著著の心學一卷、翁問答五六卷、また鑑草といふ書に伯繼が註釋を下せしもの等を讀み、男女の心を和け、佛法を説破して専ら忠孝を勵まし、明德を顯すの意なれど、佛法忌て葬祭にも魚鳥を用ひ、甚しきに至りては自家の佛壇を毀ちしもあり、黨を結ひしもの市在を併せて凡そ千人餘、

種々の流言ありしのみならず、施僧の營みをもせざるは、法令を憚らざるの所爲なりとて禁せられしなり。」（小川涉『會津藩教育考』七六頁）

藤樹学は心学とよばれていますが、会津藩はこの心学を禁止したのです。禁制の理由を簡略に言えば、清座というグループで集まるのは不穩であること、佛法に対抗すること、しかも儒教流の葬祭を用いることです。こういう人々が千人も集まるのはある種の問題と受け止められたことがわかります。

ここで注意したいことは、「忠孝」という言葉が出てくるのですが、いったい忠孝と並び称するのがいつから始まったのでしょうか。これは本筋から外れますが、最近気になっていることです。この『會津藩教育考』自体は明治になってからの書物ですが、けれども、その記事のもとになった「家世實紀」にも「忠孝」という言葉は出てきますし、「武家諸法度」にも「文武忠孝を励まし」（天和法度）と出て来ますので、江戸時代においても忠孝は使っているようです。

「家世實紀」の心学禁制の記事は、次のようになっています。「十二月廿七日、心學御制禁。近来心学を学び其類多党を結密に集り致執行、其類之内に死者有之時ハ尋常之時ハ尋常之葬に事替り、仏者を離れ取置之仏事施僧之營をも一切不仕之由粗相聞候、御大法を不憚如此所行大に不届成仕方に思召候、自今以後御制禁に候、侍は不及申町在々に至迄、存此旨、心学之学ひ堅相止候」（『会津藩家世実紀』第四卷・一〇〇頁、吉川弘文館）。

ところが、心学は許されることになりました。貞享二年ですから約三年ぐらい経ってからのことです。「十二月廿五日、心学心次第可学旨被仰出」。「近年士庶人心学修行、其徒為群、土俗疑之流言多依有之、既御禁令被仰出候得共、怪所行一切無之段被聞召し届候、孝悌忠信之教四民一日不可懈之道に候間、存寄次第可学之旨被仰下候に付、則一統え申渡之」（『会津藩家世実紀』第四卷・二六七頁）。

「家世實紀」の天和三年十二月の「心学御制禁」の記事は非常に長いものですし、貞享二年十二月二十五日の心学許可の記事もかなり長いものです。それをみるとどうも会津藩内に確執があつて、心学を禁じようとする勢力と、それを覆して禁じようとする勢力を追放しようという勢力があつたのです。たぶん皆さんがご存知の友松氏興も登場しております。これは、もっと調べてみると面白いなと思いました。ともかくこういうふうにいったん弾圧された心学が結構な教えであると認められました。

この後、会津の藤樹学は着実な展開を遂げるのですが、これと京都とのかかわりが非常に注目されるのです。先に会津から京都学館にお金を送ったことをみましたが、さらに継続的にこれを行うための機関を設けているのです。

「五十嵐養庵先生曰、岡山師葭屋町に屋敷を買求、藤樹先生の御祠堂を建、學館を建立し給ふは、甚深き御心にて、學館ハ扇子のかなめのことく也と被仰候。愚思ひらく、先師の道廿四ヶ國へ渡り候由、此黨幾千人といふ事を不知、國々にて切磋講論すへし。然るに神儒老莊之徒又は儒學にも朱子學を信する有り、三輪學とて陽明學筋有

り、堀川學とて伊藤仁齋より古學と唱ひて、徂徠學など色々學筋も有る事なれば、後世に到りては他學の筋當學に混雜し、先師の學筋國々にて違ひ候様可成事也」（「北川子示教録」）。

十七世紀の終わりから十八世紀の初めにかけてですが、この頃になりますと儒学がかなり興隆していて、朱子学もあれば三輪学（陽明学）、堀川学、徂徠学などいろいろある。そこで、藤樹の学問を受け継ぐ自分たちの学問の筋というものをきちんと守る意味で扇の要が必要だということです。

「扇子の骨より地かみは諸國也、要は京師の學館也。然れば得道之人を以て要めの學館へ館主に据置、地紙の國々より骨々を便り要めへ出て、大道を評論講議切磋する時は、天下當學異同様に成る道理。また京師へ出る事ならざる者は書信を以て預教示事におもひ侍る。養庵子は學館に甚信有りて會津中の諸同志貧富に隨て出金し、熊倉村に質藏を建、其利潤を年々京都へ爲登、學館の仕用に致しける、其仕方江府にも有之、是も江戸同志の世話にて金子爲登候か」。

京都に自分たち藤樹学派の根拠を置き、それを維持する資金を調達するために心学藏という質藏を作った、そして江戸でも同じようにやっているということです。扇にたとえると、扇の要が京都学館で、諸国の藤樹学派は骨とか紙なのです。このような機関を作ったということが大変面白いことですが、また、儒学のおかれている状況にも興味深いものがあります。儒学の各派がいろいろある中で、京都に自分たちの学問の根拠を置いて、そこで自分たちの学問が乱れないようにするという状況が生まれている。このような状況から、学問を儒学と解した上でのことですが、京都に学問都市らしい形勢ができてきたように見えます。

質藏を置いた会津の熊倉村は、現在の福島県喜多方市熊倉町熊倉に当たっていて、ここは交通の要所であったようです。

「會城甲子に丁りて驛有り、熊倉と云ふ。旅人貴と無く賤と無く、往還晝夜を分かつたず。故に坐から他邦の政法を聞き、且つ人情の厚薄を知る。固とに是れ一郡の府にして昌り盛んの地なり。粵に五十嵐氏養庵藤樹先師の學を覺り、深厚の旨趣を含み、長途の老勞を顧みず、元祿十五癸の未の年、洛に上り、且つ勢州武江處々に奔走して岡山門下の同志に談し、其の量に依り、徴金を各出し、爰に倉廩を置き、人をして民用に貸さしむ。其の利潤を纂めて以て永く京師葭屋町祠堂館舎の爲にす。嘗て子孫及び四方の同志に謂て曰く、先師岡山の尊靈 九衢に鎮座したるときは、則ち衆議評を以て之を決し、妄りに費すべからずと。因て悉な之を諾す。故に此に於て有志の士席を設けて、月々に五十の會を定め、切磋琢磨儼然なり。或は人嘆じて曰く、此の會に交るときは則ち孝悌忠信の固有する所以を知り、自然に紛紜の塵埃を脱し、世利分華の習を忘れ、超然として恰かも精神に通ずるが如し。固とに希代の會席なり。謂ふべし、清風堂なりと。此の言、固とに善し。因りて之を號して清風堂と曰ふ。其の銘に曰、云々」（柴田甚五郎「藤樹學者淵岡山のとその学派、事蹟の研究」）。

こういう金の仕送りをするような機関を設ける中で、自分のところでもむろん勉強会をする。そして、会津と京都の間では、年に少なくとも最低一度、年始の挨拶状などのやりとりをしていたようです。その挨拶状が『藤樹先生全集』第五巻に載せられています。

「享保年間、從京師之同志年頭之書中の文…爰許 御祠堂御安康二次二面々無異義超年仕候。今十一日不相變於會所讀書始メ致集會候。」（「藤樹先生行狀聞傳」『全集』第五巻）

ここから、正月十一日に読書初めを京都学館でやっていたことがうかがわれます。

「又翌年、改曆御慶不可有際限。千里同風目出度申納候…爰許ニテモ十二三人者月並六七會宛ケダイナク交修相勤メ相養ヒ罷リ有候。」（同上）

ここでは、十二、三人が集まって、月六、七回、勉強会をやって励まし合っていたということです。このことが、どのぐらいの意味を持つのかを、当時の社会的状況を調べて考えてみる価値があることだと思います。この勉強会の様子を伝えるのが、次の書簡です。

「マコトニ翁問答ニハ第一心之安樂、鑑草ニハ身安心樂トマコトニ翁問答ニハ第一心之安樂、鑑草ニハ身安心樂ト其御趣意於和解未會有之御開發ト、且夕難（有）奉存候。中國東國筋ニテモ彌被爲尊信候。」（同上）

こういうふうには、藤樹学派は、京都学館を中心に学派としての正統性を維持しつつ、離れた地域にいるものの同士で連絡を取り合いながら、道徳的实践の中で得られる樂を得ることを目指す営みがなされ続けていたのです。

京都学館と会津のかかわりは非常に深く、淵岡山の後に淵貞蔵が京都学館の三代目の館主となります。これは会津の東條次賢の子でありまして、淵岡山の子である伯養に子どもがありませんでしたので、娘婿となったわけです。こういう形でも会津と京都学館が深い関係にあったのです。

③藤樹学派と京都

中江藤樹学派にとって京都がどういう意味をもったのかということを最後に簡単に申し上げたいと思います。なぜ京都を学派の根拠としたのかということですが、それが非常に分かりにくいところがあります。先ほど申し上げましたように、まず京都には仏教の勢力が盛大にあって、その仏教の中に儒家的な学びが始まったという外面的事情があります。それを思想の内面的立場からみてどういうことがいえるのかということなのです。儒学の徒としては、仏教とは対抗する形をとっているわけです。それにしても、仏教に対抗するのに、仏教の勢力の強い京都をなぜ根拠とするのか。その思想的意味合いです。

しかも、天皇を支えとして強く持ち出さないことが、藤樹学派の学問の特質をなしています。天皇を否定するということではありません。会津藤樹学派の文献に「帝都」

という言葉が使われることがあり、天皇のいる場所ということに対する意識はきちんとあるのですけれども、それを積極的な根拠として京都が学問の中心であるべきだという語り方をしない点が、大変分かりにくいのです。

そこで、京都を根拠地とすることについて、思想のレベルの問題としていえることがあるとすれば、どういうことでしょうか。そのとき、次の言葉が注意されるのです。

「師曰、我昔急事有りて小川より武州へ下る時、先師のたまひけるは、先伊勢へ参宮して可下ルとなり是面白事也。此御趣向思ふに冥加を思召ての事なるへし。冥加を以てハ先様思ひの外首尾能キものなりとある事なるべし」。師は淵岡山で、先師は藤樹のことですが、藤樹が淵岡山に江戸に行く時は、伊勢参宮をしてから行けといったというのです。これだけでは何をいっているか分からないのですが、次のことを考慮してみたいのです。

藤樹あるいは藤樹学派にとって、日本の神道、そして神道の神が、彼らの形而上学的コスモロジーの中へ位置づけられています。そのとき、特にアマテラス以来の系譜をもつ天皇が、尊重されてよいものとして位置付いているのです。このことが積極的ではないまでも、天皇のいる京都に特別な位置を与えているのだと考えられるでしょう。

伊勢神宮が超越的な原理の日本における具体的なあらわれの場であり、その伊勢の主神アマテラスの系譜をひく天皇のいる場所が京都だという形で、京都が日本においてある特権的な位置を占めることになっているといえましょう。逆にいうと、京都は仏教の中心地ですが、藤樹学派にとっては、仏教の隆盛が京都の特権性を語るものになっていない、これがむしろ注目される点です。

そういう脈絡を考えると参考になるのが、次の五十嵐養庵の書簡です。

「(五十嵐養庵) 謂山田諸君曰、御当地御同學中、去年以來別而御進德之趣、田舎に於て令承知、何等之御大幸そや、珍重々々、其故は昔中西氏江西に被學候節、山田は宗廟のある所、先々堂々は此道興起あらん事を欲し給ひしと也。是以てこれをおもふに、山田は葦原の神徳の根本にして萬民の尊信する所、京師は帝徳によりて千里民の止る所、武江は大樹の威によりて諸民の集る所、道なくて不叶處にて候」。

京都は天皇の存在が重い意味をもっていますが、それは伊勢の宗廟につらなるものとして考えられていたのです。それだけであれば、通常の尊皇思想と変わりがないようですが、藤樹あるいは藤樹学派においては、その根本に儒学の形而上学があったのです。つまり神明靈光のうちに万物が生まれてくるという神妙性を語りうる形而上学があって、その中に、日本の神や神道が位置付いている。儒学の形而上学にもとづいて、天皇あるいは伊勢神宮の尊重が語られてくるのです。これは、通常の意味での尊皇思想とは一線を画するようなあり方です。そういう意味で藤樹および藤樹学派は、先ほどいったように、かなり原理主義的な人たち、思想に忠実な人たちであったといえましょう。

最後に、ひとつだけ藤樹学派と天皇の具体的ななかかわりを申します。徳本堂という三つの大きな文字を光格天皇の指示で右大臣一條藤公つまり藤原忠良が書いています。これはどういう事情によるかというと、藤樹の親戚筋にあたる志村周介の子どもが御所の中にいて、それをパイプに藤樹の名前が伝わっていき、それによって藤原右大臣が光格天皇の指示で徳本堂という文字を書いて与えるという形になっているようなのです（『全集』第五卷）。そうしたつながりが不思議にあるので、これからは藤樹がなぜ京都に情報を持ち得たのかといったことも含めて、その具体的な詰めはいろいろしなければいけないことがあるように思います。

今日のお話は非常に雑駁でありましたが、まとめをつければ、次のようになります。中江藤樹学派は儒学の学びを志したときに、まずもって京都を志した。そしてまた京都を根拠として儒学の活動を営もうとしたのです。思想的に脈絡づけると、彼らは孝を形而上学的宇宙論の核心におき、日本の神道をその形而上学のうちに位置づけ、宗廟という概念を持つことができました。この宗廟の現実的な担い手である天皇を尊重する、あるいは尊重しなくてはならない、そういう思想的脈絡のもとで、京都が特権化することになったのでしょうか。

この最後のところは論証しているわけではなくて、見通しを申し上げているわけです。現実の推移として、藤樹学派において、京都こそ儒学の学問の中心であると意識されていた、そして、学問都市としての京都が成立していったのです。時間もまいりましたので、これで終わりにさせていただきたいと思います。

司会 どうもありがとうございました。続きまして中国社会科学院哲学研究所の龔穎先生よりご報告していただきたいと思います。龔穎先生は、日本の思想史研究では中国ではまさに第一線でご活躍中の方と理解しております。日本でも『日本思想史学』その他にいくつか論考を発表されていまして、近世前期の儒学思想がご専門と理解しておりますが、近年では中国と日本の書籍のネットワークに関して、非常に精力的なご研究をしておられます。最近でも林羅山と建仁寺の関係のご研究をされていると伺っております。本日はそういったことも含めた最新の研究成果が伺えるのではないかと期待しております。よろしくお願い申し上げます。